

柵が一行、井戸が四基、土坑が一五基、溝が一五条である。このうち木簡が出土したのは、井戸四からである。井戸四は直径一・二五m、深さ一・三八mを測る円形の素掘井戸である。

井戸四から出土した遺物は木簡二点のほか、完形の土師器皿、木錘三点、漆器皿二点、斎串三点、曲物片、板材などであり、時期は一四世紀前半頃とみられる。

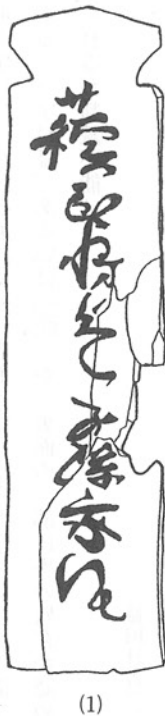
他の遺構から出土した遺物には、瓦器（甕・碗・三足釜）、滑石製石鍋、温石、東播系須恵器（捏ね鉢・碗）、土師器（羽釜・皿）、同安窯系青磁（皿）、白磁（碗）、黒色土器などがある。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「<蘇民将来之子孫家門也」 152×34×5 032

(2) 「<蘇民」 120×34×4 039

(2)は表面が腐蝕しており、赤外線テレビカメラ装置によっても全文は判読不能であった。



(中村 弘)

あかしじょう ひつじさるやぐら 兵庫・明石城跡坤 櫓

- 1 所在地 兵庫県明石市明石公園
- 2 調査期間 一九九六年（平8）八月～九月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 渡辺 昇・大西貴夫
- 5 遺跡の種類 城跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代末～明治時代初め
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

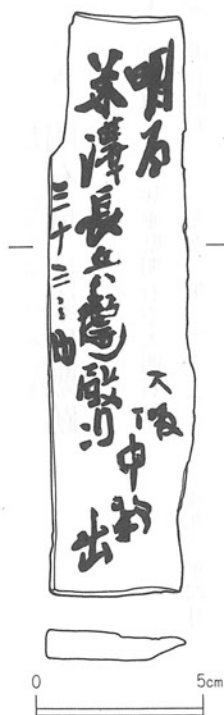
明石城は元和四年（一六一八）に小笠原忠政（忠真）によって築城され、一八代二四九年間明石藩主の居城となった城である。本丸の南

西部に位置する坤櫓もその際に築かれたと伝えられている。



(明石・須磨)

阪神淡路大震災によって明石城跡の石垣も大きな被害を受け、石垣補修工事がほぼ城内全域で行なわれることとなった。本丸石垣も同様で、櫓を曳屋工事によ



(1) 「明石」 大坂 中野
米澤長兵衛殿 出
三十三之内

175×(43)×8 081

8 木簡の积文・内容

つて移動したのち、石垣工事をする事となった。槽の基礎部分についても、元の位置に復原することにはなっているが、石垣解体に伴って削らざるを得ないことから、発掘調査を実施した。

坤槽は五×六間の三層の槽である。南北に長く東面入口を設けている。築城時に伏見城の廃材を利用したと伝えられている。明治時代に解体修理を行っており、その際に補強の石材や東石が入れられていた。当初は東西四石、南北五石の主柱通りのみ礎石が計一四石配置されており、礎石の多くには墨書で記号が記されていた。古い時期の裏込めは角礫や人頭大の石材が使われている。明治期に置かれた石材を除去し、本来の面を確認する段階で木札（木簡）が出土した。陶磁器・将棋の駒（王将）・鉄釘が共伴している。

(2) 「王将」

32×27×9.5 061

米澤家は明石城周辺の大地主であり、米澤長衛（木簡では「長兵衛」）は米穀商を営み第五十六国立銀行を設立した名士である。

（渡辺 昇）